

# 文化学園服飾博物館だより

第11号 1998. 4. 1



C. ディオールのドレス 1958年



中国・苗族子供のろうけつ染めの衣装



中国・唐代の鏡



中国・唐代の鏡

## ◇'97年度新収資料について◇

多くの他の博物館、美術館と異なり、服飾博物館で開催する展覧会は、展示品のほとんどを館の収蔵品によっています。したがって、資料収集にあたっては近く開催を予定している展覧会の企画を充実させるために、適当なものを補うということにも重点をおいています。

昨年度の収蔵品からその例を紹介すると、昨年6月に開催された「藍の布・藍の衣」のためには、山陰の緋裂や浴衣、中国・苗族のろうけつ染の衣装やインドのラグ、また、本年春に開催の「西洋服飾の流れ」に向けてのC. ディオールやドゥーセのドレスなどがあげられます。今後も利用者の方々の期待に添えるよう、展覧会の内容の多様性と専門性の向上を目指して、収蔵品の充実を図ってまいります。

近年の寄贈品として、近代の日本の服飾の他に民族衣装が多く寄せられるようになりました。昨年度の寄贈者および寄贈品は次の通りです。収集にご協力いただきましたことに感謝申し上げます。

台湾少数民族の衣装    モンゴルの帽子、アルジェリアのケープ    丸帯    打掛    ウズベク族のコート、掛布    昭和初期のワンピース    中国・白族の衣装    ウズベキスタン・カラカウパック族の頭巾    明治時代の騎兵正装

(敬称は略させていただきます)

## '97年度活動報告

### ◇ 展 示 ◇

#### 【西洋服飾の流れ ～女性の装い 1760-1960～】

4月5日～5月30日

館蔵品の中から、女性の服飾と社会や文化の関係を身近に感じることのできる18世紀から現代までの約200年間を取り上げ、ロココ時代、19世紀から20世紀初めにかけての各スタイル、さらに現代のオートクチュールのデザイナーと、時代を追って紹介しました。日頃は絵画や文献などを通じてしか知ることができない装いが、実物に接することによってわかりやすく理解することができたと、観覧者の方々に好評でした。



バスル・スタイルとクリノリン・スタイル

#### 【藍の布・藍の衣】

6月18日～8月5日

世界中で広く親しまれてきた藍染の服飾や布を館蔵品の中から紹介しました。日本関係では袴や小袖、緋や絞りの着物、刺子の仕事着などを、外国ではろうけつ染めを施した中国の苗族の衣装、経緋によるインドネシアの巻衣、赤との組合わせが鮮やかなインドの刺繍布やカメルーンの絞り染めなどを展示しました。本展は多くの来館者を迎え、日本のみならず世界各地の藍染を幅広く取り上げた点などが評価されました。



絞り染の着物と緋の裂

#### 【遊牧の民に魅せられて ～松島コレクションの 染織と装身具～】

9月25日～11月21日

インド西部からパキスタン、アフガニスタン、トルコに暮らす遊牧民の染織品収集家として知られた故松島きよえさんのコレクションは3年前から当館の所蔵となっています。本展では、30年に渡って集められた膨大な数の資料の中から特に整理の進んだ、インド西部、パキスタン、アフガニスタン東部に住む15余りの部族の衣装、装身具、敷物などを展示しました。部族の誇りに裏付けされた力強く豊かな表現に、多くの観覧者から感嘆の声が寄せられました。

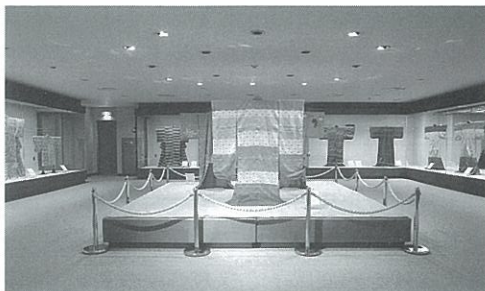


ラクダを囲んだインド西部の各部族

#### 【きもの 匠の技 ～デュボスク・コレクション～】

1月5日～2月17日

本展は、フランスの元外交官のジャン-ピエール・デュボスク氏の夫人久子さんが収集した現代の着物約40点と、帯、帯締など約20点を紹介しました。これらは4人の重要無形文化財保持者（人間国宝）の作品を初めとして、これまで第一線で活躍してきた優秀な染織作家十数人の手になるものです。服飾博物館で現代の着物を展示したのは初めてですが、好評のうちに終了しました。



織りと絞りの作品

### ◇地球市民かながわプラザに展示協力◇

服飾博物館では、より多くの方々に服飾に対する興味を深めていただけるよう、館内だけでなく、資料の貸出を初め館外の活動にも力を注いでいます。今回はその中から、2年余りにわたり協力した神奈川県施設である「地球市民かながわプラザ・こどもの国際理解展示室」について紹介します。

この施設は実物を通して世界の様々な生活文化に触れ、互いの相違点や共通点を発見し、理解し合おうという目的のもと、部材まで現地から運んで建てた家屋の他、生活道具、衣装、楽器等のコーナーが設けられています。民族衣装は風土、歴史、宗教観と深く結び付き、理解のためには多角的な知識と経験を要します。当館では今まで築いた各地域の専門家とのネットワークを生かし、資料の選定、現地での収集、各衣装の特徴の解説から着装方法のイラスト化までを監修しましたが、子供に理解してもらうことは大人以上に難しいということに改めて痛感しました。

2月1日に開館した同館は、子供達だけでなく大人の興味にも十分答えてくれます。ぜひ一度お出掛けになられてはいかがでしょうか。



観覧者を迎える各地の民族、奥が衣装体験のコーナー

### ◇資料の館外貸出◇

館蔵資料の貸出しを次の通り行いました。

- ・仙台市博物館 「～江戸時代の女性服飾に見る～涼しさの表現」 7月15日～8月10日 / 小袖 3点
- ・世界の民俗人形博物館 「オープニング展示」 9月4日～10月27日 / 西洋の帽子 3点
- ・江戸東京博物館 「皇女和宮 ～幕末の朝廷と幕府～」 10月7日～11月24日 / 小袖、料紙箱、守り刀（孝明天皇下賜）、懐剣、袋物
- ・香りの博物館 「日本の香り」 11月1日～11月24日 / 小袖 1点
- ・銀座松屋 「知られざる御用絵師の世界」 1月3日～1月19日 / 料紙箱（土佐光貞筆）

### ◇服飾博物館における学芸員実習◇

文化学園内に併設する文化女子大学では、学芸員資格を得るためのカリキュラムである学芸員課程が設けられています。資格取得のためには講義授業のほかに博物館で実務実習を行なうことが義務づけられており、服飾博物館では毎年100名近い家政学部の学生の実習を受け入れています。さらに97年度は新たに開講した文学部の学芸員課程の履修生48名を対象に3日間の集中実習が実施されました。

実習の内容は、収集、保存、収蔵、広報、運営など学芸員として身につけておかなくてはならない知識はもちろんのこと、着物の畳み方や採寸の仕方、マネキンへのドレスの着せ付け方、実物資料の状態を記録するための写真撮影の方法など、服飾博物館ならではの実習を行いました。そして最終日には4、5人のグループに分かれて、学生自らが何種類かの実物資料を用いて、それらを配置よく展示ケースの中に展示するという実習が学芸員の指導のもとに行なわれ、皆真剣なまなざしで取り組んでいました。3日間の実習を通して、博物館の裏側の苦労や工夫を知ることができたようです。



展示の実習

## ’98年度展示案内

### 平常展【西洋服飾の流れ ～女性の装い 1760-1970～】 3月10日～4月24日

昨春の企画展と同様、18世紀のロココ時代から現代に至る約200年間の女性の装いを、実物を通して身近に見ていただくための展示です。華麗なロココ時代に始まり、エンパイア、ロマンチック、クリノリン、バスル、アール・ヌーヴォーと変化したスタイルは、第一次世界大戦後、女性の社会進出と1920年代のアール・デコの影響により機能的で直線的なスタイルへ移行し、現代の服飾に通じていきます。このような服飾の流れを帽子や靴、アクセサリなどを加え当館の所蔵資料で構成し、また現代のデザイナーによる作品の展示では、二度の大戦で低迷した服飾界に活気をもたらしたC. ディオールに重点をおき、紹介いたします。

### 特別展【近代の洋装】（仮称） 10月23日～11月27日

今日、私たちは洋服を当然のものとして着用していますが、洋服が本格的に日本に取り入れられるようになったのは、わずか100年余り前のことです。本展は、明治時代から昭和初期にかけての洋装を取り上げ、当館の所蔵品の中から紹介します。鹿鳴館時代に始まり、西洋の流行にしたがって次々とスタイルが変化していった上流階級の女子の洋服、宮中の儀式の際に着用された礼服、軍服などで構成します。主な展示品は明治天皇の皇后の大礼服、朝香宮妃の大礼服、梨本宮妃のドレス、三井家の夫人のドレス、文官・有爵者・宮内官の大礼服、陸海軍の軍服などです。

\*以上の予定は都合により変更されることがあります

\*5月から9月の展示は、校舎新築にともなう学园内整備のため未定

## —— ホームページ開設のお知らせ ——

パソコンの普及が急速に進む中、学校法人文化学園では現在インターネットのホームページの整備をすすめています。服飾博物館もこのホームページ内で6ページ分の情報を作成中です。その内容は、所蔵品のあらましや現在開催中の展示の紹介、次回展示の案内、刊行物の案内などです。お問い合わせの多い次回展示予定についても詳しい情報をお届けできるようになります。近々発信の予定です。

学校法人文化学園ホームページアドレス <http://www.bunka.ac.jp>

## —— 利 用 案 内 ——

【開館時間】 平日：午前10時～午後4時30分／土曜日：午前10時～午後3時（入館は閉館の30分前まで）

【休館日】 日曜日・祝日・年末年始・夏期休暇／6月23日／11月5日、6日／展示替の期間

【入館料】 一般300円・学生200円（20名以上の団体は一般200円・学生150円） 特別展は別料金

※文化学園の職員・学生は無料、また職員が同伴する方も無料

文化学園服飾博物館だより 第11号

編集・発行 文化学園服飾博物館

〒151-8521 東京都渋谷区代々木3-22-1

TEL. 03-3299-2387